

## 「自然を楽しむ」

2018年03月05日

秋が深まり、空気が澄んでくると、わが家のベランダから富士山が見えるようになる。日の出の時は、朝日に映えた赤い富士である。日中は雪をかぶった白い富士で、日が落ちる頃は、夕焼けを背景にして紫色の富士が浮き上がる。「残日録」を書く頃になったからであろうか、紫富士が好きである。富士山は形が良く、皆が憧れるのに納得する。爆発などして、形が崩れないことを望む。春が来ると、霞がかかり、朝夕しか、見えなくなる。

ベランダの前の芝生に、大木の桜が並んでいる。満開の時は見事である。窓辺から、一年中、見ているが、開花に備え、冬からエネルギーを蓄えている。艶やかな花を咲かせるためには、蓄える時が必要なのである。桜の木々の間に、2本のケヤキがある。台湾リスが、ケヤキの木の皮を食べ、その枝の先は枯れて行く。これらの木々に色々な小鳥が来る。名前知らないが、だいたい、つがいできて来る。彼らは食料求めと恋に熱心なようだ。

南側のベランダは、かなりのスペースがある。妻はバラが好きで、バラの鉢が十数個ある。結婚式や葬式でいただいたバラを持ち帰り、さし木をしている。結構、ついている。春には大輪の花を咲かせ、秋には小ぶりだが、可憐な花を咲かせている。両親も花が好きで、さし木をしていた。さし木は痩せた土地がよくつくと言っていたのを思い出す。我が家の鉢の土は痩せているから、つくのであろうか。中でも、複雑な色を醸し出すアンネのバラが気に入っている。

ヒヨドリは夏ごろから緑の実をつける。赤くなってくると、カバーをかける。ヒヨドリに食われないためである。クリスマスが過ぎた頃、カバーを取ると、ヒヨドリが来て、あつという間に食べてしまう。正月用に、赤い実のついたセンリョウをいただき、満喫し終えて、鉢にさして置くと、これまた、あつという間に食べられてしまう。ボケが赤い蕾をつけると、ヒヨドリがついばむ。花が咲く前に、皆食べられてしまう。ボケには気の毒だが、食料の少ない冬のヒヨドリには貴重な食べ物なのである。草木は「置かれた場所で咲くしかない」。土が痩せ、環境の悪いところでも懸命に命を保って成長している。つくづく忍耐強いと感心する。動物は動き回れるので、好きなところに移動できる。我が家の貧弱なベランダの花実に、蝶やメジロが来ることもある。もっと広々とした、食料の豊かな所に行けばと思うのだが、結構、訪ねて来て、楽しませてくれる。

M・T氏が珍しい花を届けてくださる。マユハケは頬を刷くようなまん丸い、ネギ坊主のような珍しい花をつける。ハツカクは、その名の通り八角の緑濃い葉をつける。葉の下に小さな花を咲かせるが、メインは八角の葉である。高山植物のニッコウキスゲに似た小型のキスゲもいただいた。艶やかな黄色は楽しめる。毎年、シクラメンを届けてくださる花屋がある。一冬、楽しめるように作ってあると聞かすが、妻は大事に育て、花は年々小さくなるけれども、4年前のシクラメンも花を咲かせてくれる。大、中、小、そして、極小の4鉢を楽しんでいる。彼らは、自分であろうと懸命である。

私は、30分から1時間くらい散歩をしている。車とすれ違うのを避けて、団地と公園を歩いている。団地の中では、真っ先にウメの花が咲き、ジンチョウゲが続く。春は香りから来るようだ。ある公園には、数本のシャクナゲの大きな木があり、春になると、木いっぱい赤とピンクの見事な花を咲かせる。

子どもの頃は、自然豊かな所で過ごしたが、さほど関心を持たなかった。今は、彼らの命を躍動させる正直な姿に感動を覚えるようになった。